

姿勢研究所研究助成報告書

病院の流し台における姿勢の研究  
— つらい姿勢の調査と改善 —

研究代表者

埼玉県立衛生短期大学 大河原千鶴子

共同研究者

埼玉県立衛生短期大学 樋之津淳子

早稲田大学人間科学部 二上博子

研究協力者

社会保険埼玉中央病院 田村葉子

## 1. はじめに

今日、我々の生活における衣食住は量、質ともに豊かになってきている。家庭や職場のそうした変化に比べ病院での特に入院患者の居住性の進歩は遅々としており、先進国の中で我が国の現状はきわめて低いレベルにあるといえる。

病院の設備の中でも診断、治療機器の進歩は著しく、研究開発が盛んに行われているが、入院患者の日常生活に大きく関わっている看護をとりまく環境設備、条件の整備や看護用具は旧態依然としているのが現状である。加えて過酷な労働条件と慢性的な人手不足の悪循環という状況の中で高齢化社会を迎えて看護の需要が激増し、看護活動領域の拡大、専門化が期待されている。

病院のなりたちについて歴史的にみても、欧米に比べ我が国は宗教的な背景の違いもあるがその発達形態に大きな相違がある。すなわち欧米ではまず、傷病者を看とるための「生活の場」を提供し、あとから診療設備が加わったが、我が国では医師の「診療の場」として外来ができ入院設備も診断、治療の場として急速に発展したという経緯がある。

近代看護の創始者といわれるF. ナイチンゲールは今から130年余り前にクリミア戦争での英国陸軍病院における傷病兵がおかれた衛生状態の惨状を改善するためにまず何をしたかという「台所を5ヶ所、洗濯場を1ヶ所開設した」とある。つまり流し台を設置したのである。もちろん、野戦病院と現在の病院では比較にならない面も多々あるが患者の生活の場としての環境条件を整える事が看護本来の役割であり、患者に対する直接的な看護と同様に重要なのである。

看護を展開していく上で絶対不可欠な条件は、まず看護を受ける患者にとって安全で安楽な状態で、できる限り身体に苦痛や負担を与えずに看護を遂行していくことである。一方、実際に看護者が業務を行っていく上で円滑に効率良く実施されているか、看護作業時の動作、姿勢などによる生体負担を少なくすることや安全性への配慮がなされているかというとまだまだ改善すべき問題は多い。

本研究では看護作業の環境条件のうち、病院の流し台における看護者の姿勢に着目し、人やものを取りまく環境を効率良く人間の身体的特性、精神的機能を基に研究する科学である人間工学の観点から検討することにした。

## 2. 研究目的

病院における看護作業は、長時間の立位や前屈など、つらい姿勢をとることが多い。その中でも自分で動けない患者をベッドから車椅子に移したり、体の向きを変える（体位変換）などベッド上の患者に対して行なう作業はその代表といえ